

平成30年度実施 子ども読書アンケート結果による分析

第1次計画策定資料として、平成25年度に調査された数値から、計画推進後の結果数値の推移を図るために、同対象学年の児童、生徒、保護者に対するアンケート調査を実施しました。(事前配布 参考資料 参照)

1. 子どもの読書に対する意識、読書活動について

読書が、「好きか、好きでないか」という問いに対しては、どの学年も若干ではありますが、読書が好きな子どもたちが増えています。

加えて、今回新設問として「学校での読書」に関する調査もしたところ、学校での読書について「まったく読まない」と答えた子どもは、小学2、5年生が1%、中学2年生が8%、高校2年生は、49%となっています。

国の調査による不読率(平成29年度)は、小学生が5.6%、中学生が15.0%、高校生が50.4%となっており、国の第4次推進計画にて令和4年度までの目標数値(小学生2%、中学生8%、高校生26%以下)と比較しても、本市の子どもたちの読書活動は、低いものではないことがわかります。

2. 家庭での読書活動について

「家族から本を読んでもらったことがあるか」、「家での読書について」の調査結果は、両設問とも「毎日読む」、「まったく読まない」双方増えており、家庭での読書活動に対する子どもたちの傾向は、二極化していることがわかります。

それと同様に保護者のアンケート調査からも、子どもに対して「読み聞かせをしているか(していたか)」の設問を見ると、「よくする(した)」、「まったくしない(しなかった)」双方増えており、保護者の読書支援も同様な傾向が見られます。読書を好きな子どもたちは、減少してはいないものの、全国的にみられている二極化が「家庭での読書に対する意識」にも表われています。

3. 情報通信手段の普及、多様化について

子どもたちが本を読まない理由について、今回「インターネット、アプリ」に関する項目を追加したところ、年齢が高くなるにつれて、不読理由の大きな一つとなっていることがわかります。

スマートフォン保有率は、2010年9.7%が2013年には62.6%と急激に増加し、2017年にはパソコン、固定電話の保有率を越えています。(総務省平成29年度、30年度情報通信白書より)近年の情報通信手段の普及や多様化は、子どもの読書環境にも大きな影響を与えている可能性があると考えられます。